HONDA

ACTY CRAWLER

取扱説明書

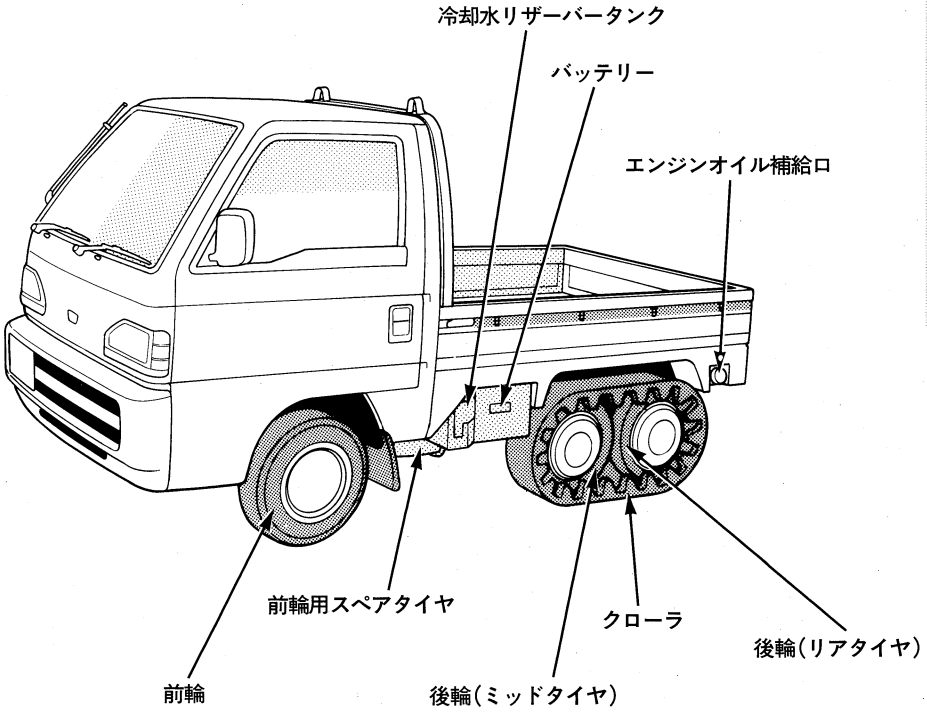
ご使用のまえに よくお読みください。

はじめに

この取扱説明書は、アクティ　クローラ仕様車に装備された機構の取り扱いについてのみ説明してあります。
その他の内容についてはアクティ取扱説明書をご覧ください。
文中の 注意 と アドバイス のマークのところは重要ですからしっかりお読みください。

車の仕様などの変更により、この本の内容と実車が一致しない場合がありますのでご了承ください。

各部の名称



もくじ

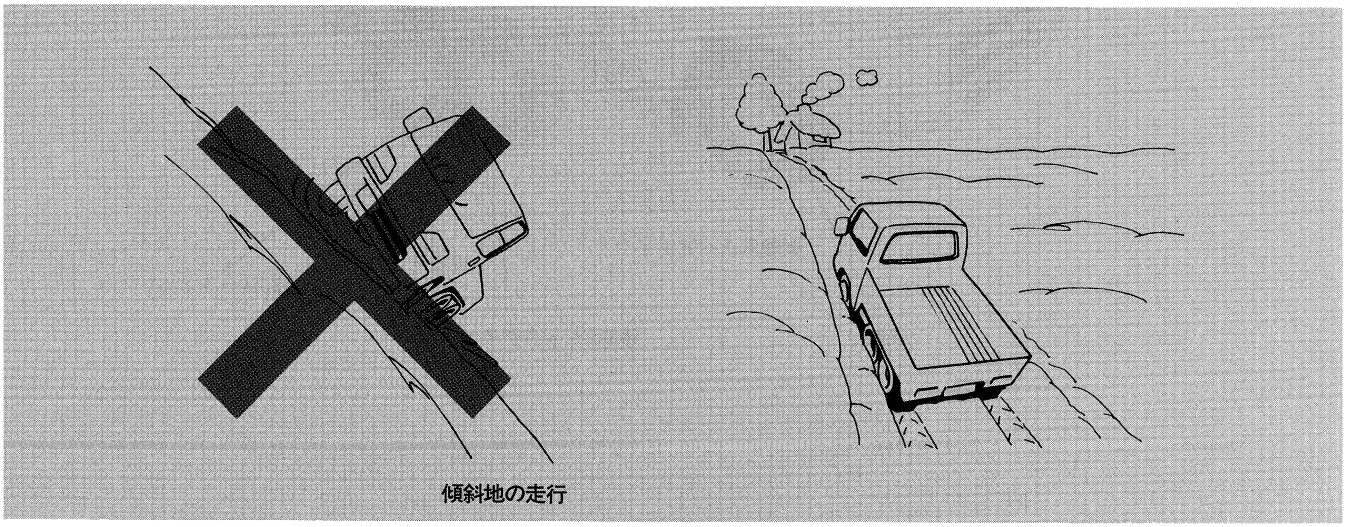
●必読ポイント……2ページ
●運行前点検……4ページ
●変速レバー(チェンジレバー)の操作……9ページ
●スペアタイヤの脱着(前輪用)……10ページ
●バッテリーあがりのとき……11ページ
●6か月点検……12ページ
●簡単な整備……16ページ
●走行後の手入れ……19ページ
●サービスデータ……20ページ
●点検整備方式……巻末

必読ポイント

1. 走行前に

この車はどんな所でも走れる万能車ではありません。
走行時の注意を良く理解してお使いください。

この車はクローラを装着しないで走行すると「整備不良車」となり法律違反となります。



傾斜地の走行

2. 走行前点検

安全、快適にお使いいただく為にクローラ車の点検整備方式に従って点検、整備を行なってください。

・クローラの点検(張り、摩耗、損傷、亀裂)を行ってください。

これらの点検を行わないと停止距離の増加、クローラの破断、脱輪などの発生により思わぬ事故の原因となります。また異音などの発生原因となります。

クローラには、一般のタイヤと同じようにウェアインジケーター(摩耗限度表示)が設定されています。必らず点検してください。

・積雪路、凍結路、高速走行時は、残溝の点検(サイプの有無)を行ってください。

サイプが摩耗していると急な横滑りなど思わぬ事故の原因になります。

クローラの点検→8ページ

3. 走行時の注意

急な操作

急発進、急停車、急旋回などの無理な運転は思わぬ事故の原因になりますのでできるだけ避けてください。

高速走行

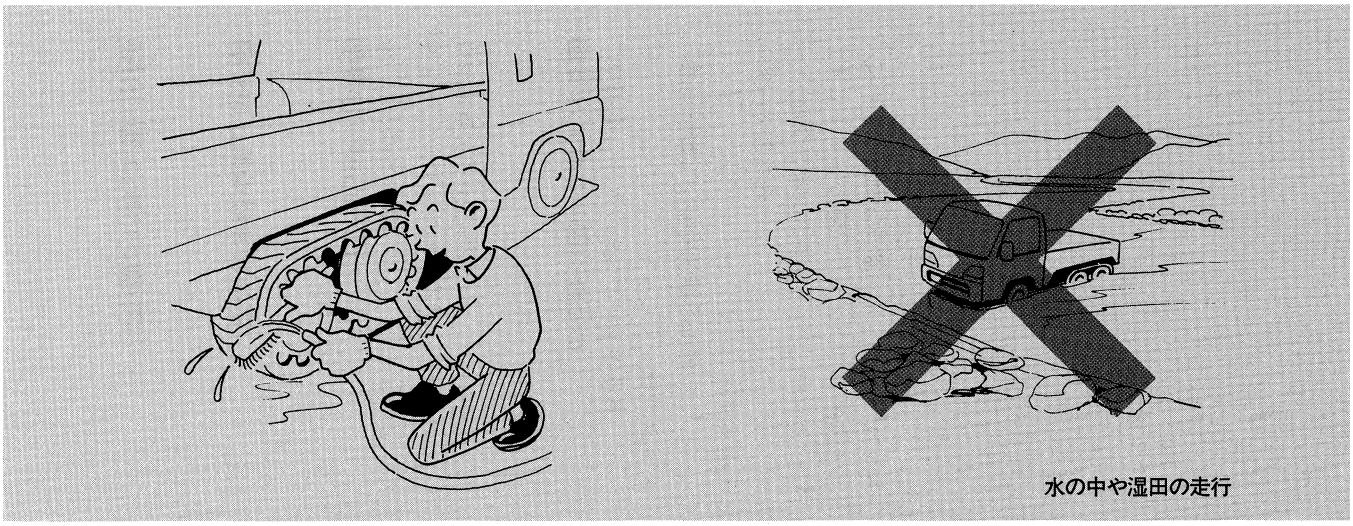
高速での連続走行はクローラの寿命を縮める原因になりますのでできるだけ高速走行は避けてください。

傾斜地の走行

急斜面の横断、旋回、転回は思わぬ事故の原因となりますので安全で緩やかな斜面を選んで走行してください。

積雪路、凍結路の走行

積雪路、凍結路の走行は思わぬスリップなどの危険がありますので十分に注意して走行してください。



水の中や湿田の走行

不整地の走行

・不整地を走行する場合はあらかじめ路面の状態(深さ、ガレキの有無など)を確かめてゆっくりと走行してください。路面の状態を確かめずに走行するとラジエーターの損傷など思わぬ故障の原因となります。

・水の中や湿田などの走行はさけてください。

やむをえず走行した場合は、必ずホンダ販売店で点検、整備を受けてください。

けん引作業について

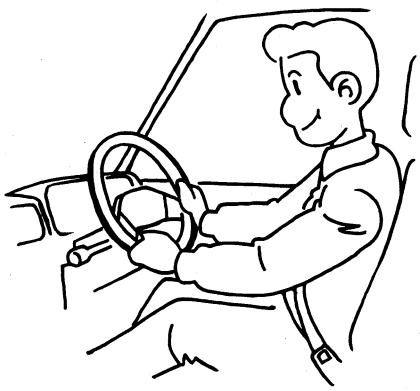
不整地でのけん引作業やそれに類似する作業は駆動系や車体に思わぬ故障が発生する恐れがありますので行わないでください。

4. 走行後の点検

付着した異物の除去

車についた泥や雪などは固着や凍結による思わぬ故障の原因になりますので洗車をしてよく取り除いてください。作業の際は鋭利な物でたたいたりしないでください。

運行前点検



運行前点検は、自動車を使う人が、1日1回、運転する前に実施するよう法令により義務づけられています。
この点検は車の下をのぞいたり、車のまわりを回ったり、また、運転席にすわって車の状態をみることによって容易に出来るものです。運行前点検を確実に行うためには一定の順序で行うことが効果的です。
点検作業は車を水平な場所に置いて行ってください。
下に点検手順を示します。

アドバイス

●異常が認められた場合は事故や故障を防ぐため、必ずホンダ販売店で点検を受けてください。

運行前点検の順序

❶前日の異状箇所の点検

❷車の下をのぞいて

※冷却装置の点検　↓5ページ
※エンジンオイル量の点検　↓6ページ
※発電機ベルトの点検　↓6ページ

❸車のまわりを回りながら

反射器、ナンバープレートの点検　↓アクティ
灯火装置、方向指示器の点検　↓アクティ
タイヤの点検（※溝の深さの点検）　↓7ページ
クローラの点検　↓8ページ
ブレーキ液量の点検　↓アクティ

❹運転席にすわって

後写鏡の点検　↓アクティ
駐車ブレーキの点検　↓アクティ
ブレーキの点検　↓アクティ
※燃料の量の点検　↓アクティ

※印の点検項目は、80km／h以上で走行できる高速道路などを走行する予定がない場合には、行わなくてもよい項目です。

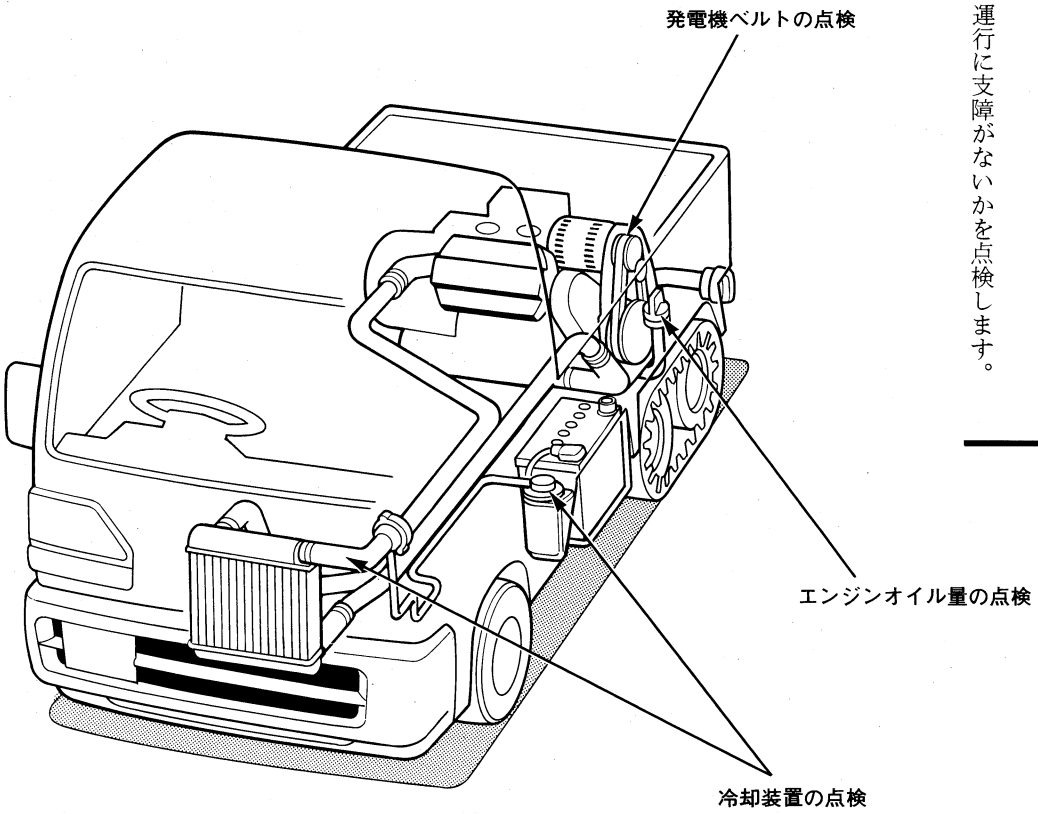
↓アクティの点検項目は、アクティ取扱説明書をごらんください。

車の心臓部は、念入りにチェック。

❶前日の異状箇所の点検

運行に支障がないかを点検します。

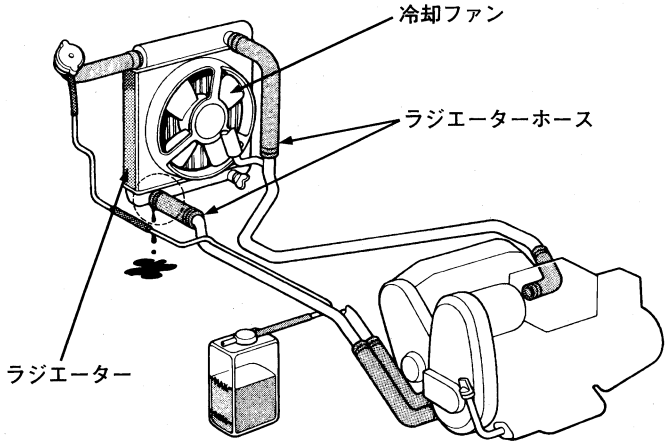
❷車の下をのぞいて



※冷却装置の点検

●水漏れ

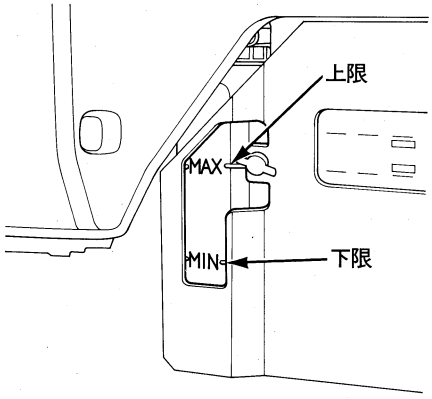
ラジエーター、ラジエーターホースなどから水漏れがないかを点検します。このとき、車を停めておいた地面に水が漏れたあとがないかも調べます。



●冷却水の量

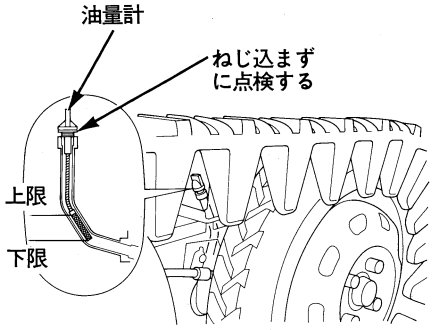
リザーバータンク内の冷却水の量が上限（MAX）と下限（MIN）の間にあるかを点検します。
液面が下限より下がっていたらすぐ補給してください。

冷却水の補給 ↓17ページ



※エンジンオイル量の点検

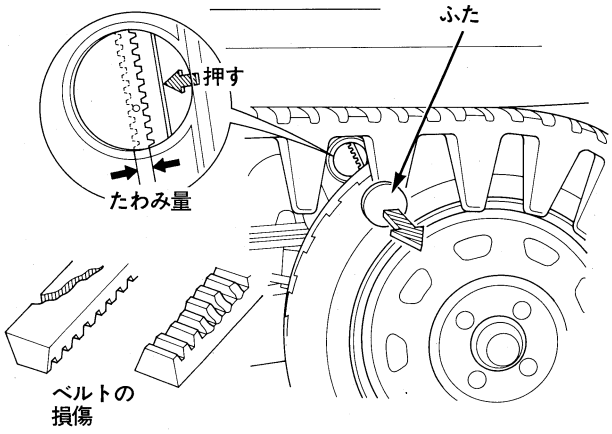
エンジンオイルの量が、油量計（オイルレベルゲージ）の目盛りの上限と下限の間にあるかを点検します。
点検は、油量計を抜き取り、付着しているオイルをふいて、ねじ込まず差し込んで、そのまま引き抜きオイルの量をみます。
下限に近くなったら上限まで補給してください。



●点検するときは、車を水平な場所に置いて行ってください。傾いていると正確な量を示さないことがあります。
●オイル量はエンジン始動前かエンジンを止めてから少なくとも3分以上たってから点検してください。

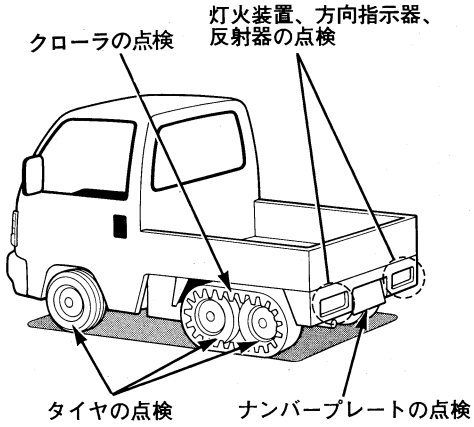
※発電機ベルトの点検

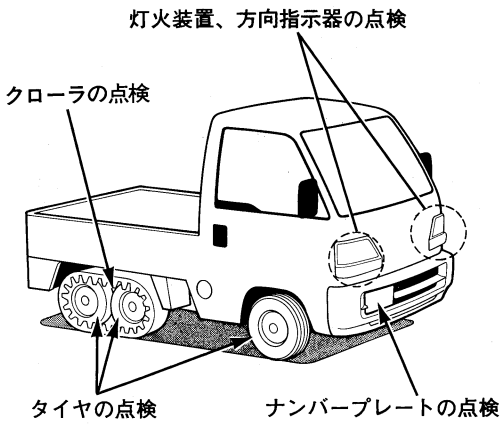
点検窓のふたを外し、発電機ベルトの中央部を強く押して（10kgの荷重）、ベルトのたわみ量を点検します。
このときベルトに傷がないかも点検します。
適正たわみ量…9.0～10.5㎜



車の外観、身だしなみ。

❸車のまわりを回りながら





タイヤの点検

●空気圧

タイヤ(前輪)の接地部のたわみ状態を見て、空気圧が適当であるかを点検します。リヤ・ミッドタイヤは、エアゲージで点検します。

適正

過多

不足

(単位kg／cm²)

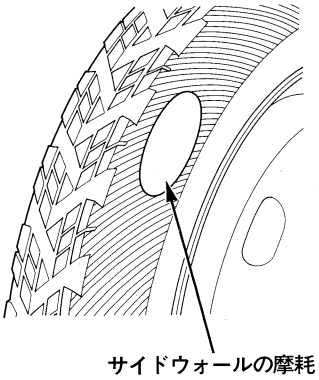
空気圧 ＼ サイズ	一般及び高速走行時共			
	2名+100kg以下		定積載	
	前輪	後輪	前輪	後輪
90/105D13-8PR LT	—	3.0	—	3.0
145R12-6PR LT	1.8	—	2.0	—

●タイヤの空気圧やサイズは、運転席側ドア開口部に表示してあります。

●サイドウォールの魔耗(ミッドタイヤ・リアタイヤ)

後輪のサイドウォール(側面)帆布の摩耗の点検です。

摩耗などタイヤのサイドウォールが損傷をうけてゴムが露出していないかを点検します。



●タイヤの使用限界をこえて使用すると、思わぬ事故の原因となります。ウエアインジケーターやサイドウォールのゴムが表われたらホンダ販売店で交換を受けてください。

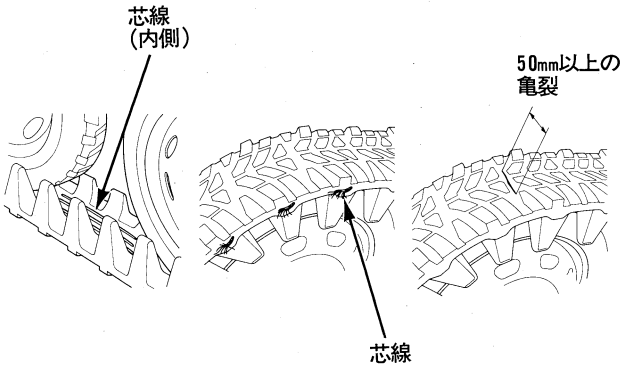
●亀裂、損傷、異状な摩耗、異物のかみ込み

アクティの取扱説明書をごらんください。

クローラの点検

●亀裂、損傷

クローラの接地面や内側に著しい亀裂や損傷がないかを点検します。

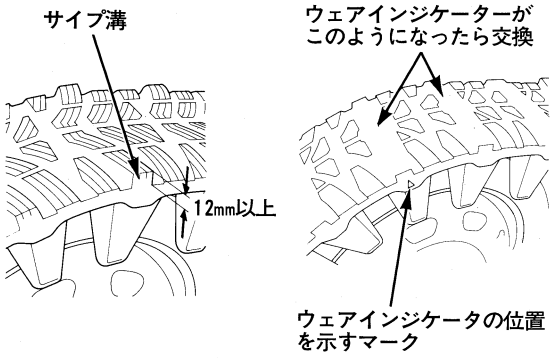


注意

●クローラの亀裂が50mm以上のときや、芯線(スチールコード)や芯金が露出している場合は思わぬ事故の原因となる恐れがありますのでホンダ販売店でクローラの交換を受けてください。

●溝の深さ、摩耗

クローラのウェアインジケーター(摩耗限度表示)により接地面や内側に極端にすり減った所がないかを点検します。



注意

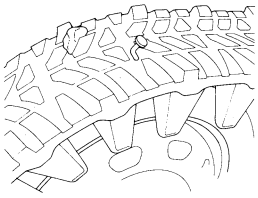
●クローラの使用限界をこえて使用すると思わぬ事故の原因となり危険です。
ウェアインジケーターが表われたらただちにホンダ販売店でクローラの交換を受けてください。

アドバイス

●クローラの残溝の深さが12mm以下(サイプ溝がなくなる)になると積雪路、凍結路、高速での走行性能が低下しますのでできるだけさけてください。

●異物のかみ込み

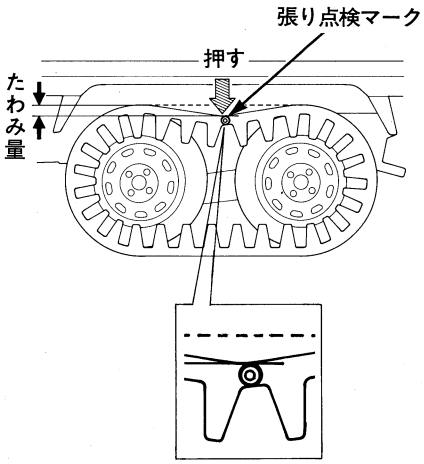
クローラに釘や石などがささったり、かみ込んでいないかを点検します。



スピードに合わせてギヤチェンジ。

●張り

クローラに表示してある張り点検マーク部をミッドタイヤとリヤタイヤの中間に合わせ手で強く押して（10kgの荷重）たわみ量を点検します。



適正たわみ量 ……5.0～7.0mm

注意

●たわみ量が5～7mmの範囲から外れている場合は思わぬ事故の原因となる恐れがありますのでホンダ販売店で調整を受けてください。

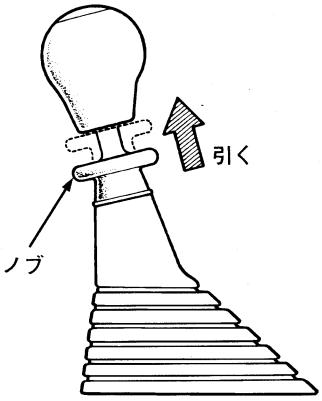
アドバイス

●クローラの表面が変色することがありますが異常ではありません。

変速レバー（チェンジレバー）の操作

●変速レバー

UL（超低速前進）、UR（超低速後退）への変速は、車が完全に停止した状態でノブを引きあげながら操作します。



アドバイス

●UL（ウルトラロー）、UR（ウルトラリバース）は、超低速走行を必要とするときにご使用ください。

●ULからURへは直接、変速できません。ノブを引きあげながら変速してください。

●速度範囲

平坦地における各変速位置での速度範囲は左の表を参考にしてください。

（単位　km/h）

変速位置	速度範囲
	4速車
UL	0～10
1　速	0～25
2　速	10～45
3　速	20～70
4　速	30～

アドバイス

●右の表は空車時の速度範囲です。積載するとエンジンに負担がかかるので、登坂時は早目に一段下のギヤにしてください。

●エンジンを過回転させないため、上限速度を守って走行してください。

●1000km走行するまでは、エンジン保護のため急発進、急加速を避け、控えめな運転をしてください。

注意

●法定速度を守って走行してください。

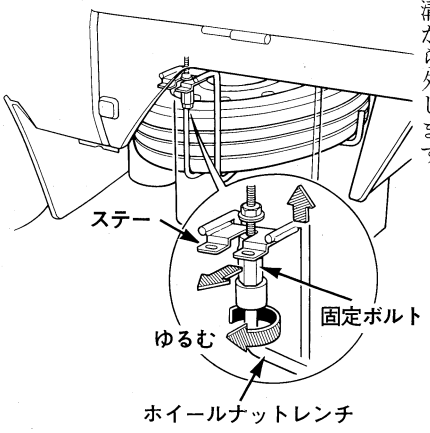
●滑りやすい路面では、急激なエンジンブレーキがタイヤのスリップを招くことがあります。シフトダウンする際の車速には十分注意してください。

パンクしたとき

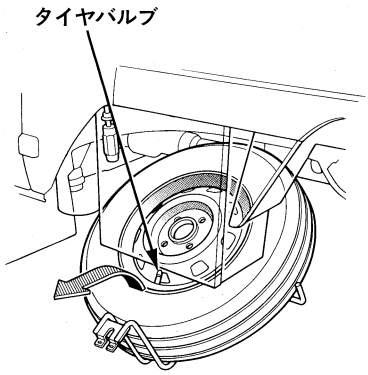
スペアタイヤの脱着(前輪用)

●取り外し

固定ボルトをホイールナットレンチでゆるめてから、ステーを持ち上げ、固定ボルトを溝から外します。

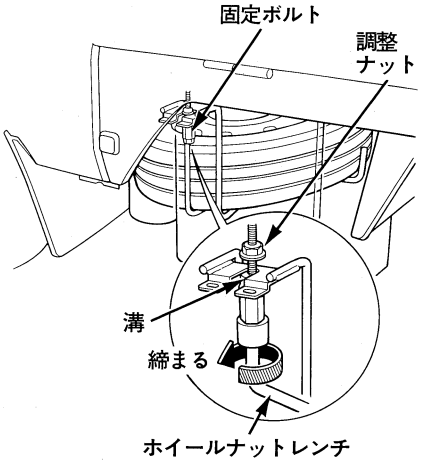


スペアタイヤを取り出します。



●取り付け

タイヤバルブ部を上に向けて取り付けます。固定ボルトを溝の奥まで入れ、固定ボルトをホイールナットレンチで締め付けます。



●ゆるみ、ガタがある場合は、取り付け部の変形などを確認し、異常がなければ、調節ナットを回して上にあげ、更にボルトを締め付けます。

●スペアタイヤが万一ゆるみ等により、取り付けが不安定な状態になっていると、走行中の脱落により思わぬ事故となり危険です。
取り付け後は、取り付け状態を十分に確認してください。

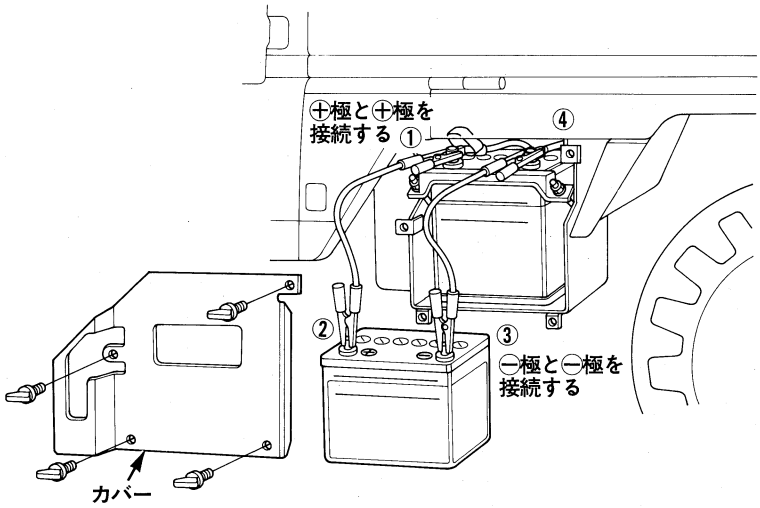
リヤ・ミッドタイヤがパンクしたとき

リヤ・ミッドタイヤがパンクした場合は、ホンダ販売店で修理又は、交換を受けてください。

●リヤ・ミッドタイヤがパンクしたまま走行すると、車体のふらつきなどにより思わぬ事故の原因となる恐れがあります。

万一のとき

バッテリーあがりのとき



他のバッテリーを利用してエンジンをかけるときは、荷台左下のカバーを取り外し、図の番号順にコードを接続し、エンジン始動後は逆の順序でコードを取り外してください。

- 放電したバッテリーに他のバッテリーを接続してエンジンを始動する場合は、⊕⊖極を間違えないように注意してください。
- バッテリーの充電をするときは、すべてのキャップを外してください。
- 充電中は換気に十分注意し、換気の悪い場所では行わないでください。
- バッテリーを取り扱うときはショートによる火花や火気に注意してください。バッテリーからは可燃性のガスが発生しているので引火すると爆発の危険があります。

6か月点検

定期点検は、車を使用する人が定期的に行う点検で、法令によって定められています。自家用軽貨物車には6か月、12か月、24か月の3種類があり、6か月点検にはⒶとⒷの項目があります。

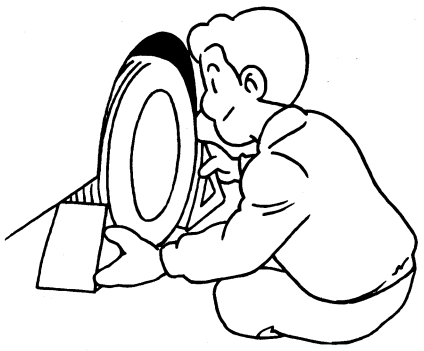
Ⓐ…点検を行うに当たって、自動車の構造、装置に関する基礎的な技術知識を有する人であれば、自らでも実施可能なもの。

Ⓑ…点検を行うに当たって、専門的な技術知識を必要とするもの、専門的な機械、工具や測定器具を必要とするもの、装置または部品の分解、取外しを伴うもの。

ご自身で6か月点検のⒶ項目を行う場合は、次頁以降の点検方法に基づき作業してください。

●点検結果は所定の用紙に記録する必要があります。ご自身で出来ない項目については、ホンダ販売店で点検を受け記録してください。

●点検結果の記録用紙(定期点検整備記録簿)は、別添整備手帳に綴込まれています。記録は、2年間保存してください。



点検するときは安全に十分注意してください。

●静止状態での点検は安全のため平坦な場所で、車輪に輪止めをしてから行ってください。

●換気の悪い車庫や屋内ではエンジンをかけたままにしないでください。

●走行して点検するときは周囲の交通事情に十分注意して行ってください。

●ジャッキアップして点検するときは、適切なジャッキを使ってください。(お車に備え付けのジャッキは、前輪の交換時のみに使うものです)。

点検項目

ブレーキペダルの遊び、踏み込んだときの床板とのすき間……ア
ブレーキのきき具合……ア
駐車ブレーキレバーの引きしろ……ア
ブレーキホース、パイプの漏れ、損傷、取り付け状態……ア
リザーバータンクの液量……ア
タイヤの空気圧……13
タイヤの亀裂、損傷……ア
タイヤ溝の深さ、異状な摩耗……ア
タイヤの金属片、石、その他の異物……ア
タイヤのサイドウォールの摩耗……13
クローラの亀裂、損傷……13
クローラの溝の深さ、摩耗……14
クローラの異物……14
クローラの張り……14
クラッチペダルの遊び、切れたときの床板とのすき間……ア
バッテリーの液量……15
エンジンオイルの汚れ、量……15
冷却水の量……15
発電機ベルトのゆるみ、損傷……16
灯火装置、方向指示器の作用……ア

ア印の点検項目は、アクティ取扱説明書をごらんください。

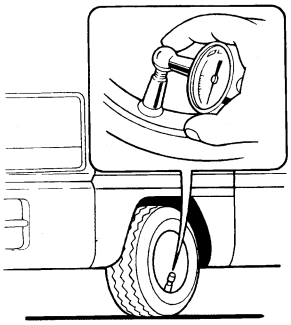
各部にわたって念入りチェック。

タイヤの空気圧

走行前、タイヤが冷えているときにタイヤゲージで空気圧を点検します。

（単位kg／cm²）

空気圧 ＼ サイズ	一般及び高速走行時共			
	2名＋100kg以下		定積載	
	前輪	後輪	前輪	後輪
90/105D13-8PR LT	—	3.0	—	3.0
145R12-6PR LT	1.8	—	2.0	—



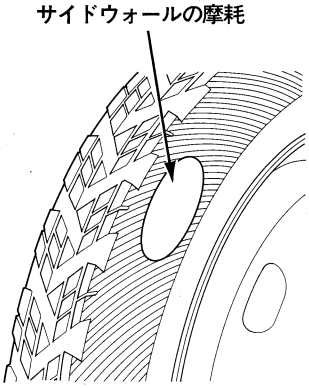
アドバイス

●スペアタイヤの空気圧は基準値より0・2kg／cm²くらい高めにしておき、使うとき調整してください。

クローラのサイドウォールの摩耗（ミッドタイヤ・リアタイヤ）

後輪のサイドウォール（側面）帆布の摩耗の点検です。

摩耗などタイヤのサイドウォールが損傷をうけてゴムが露出していないかを点検します。

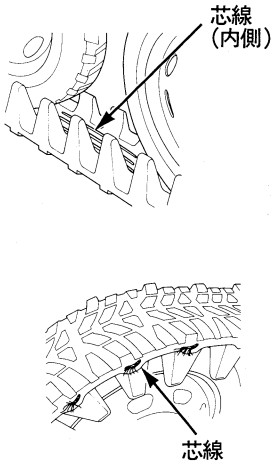


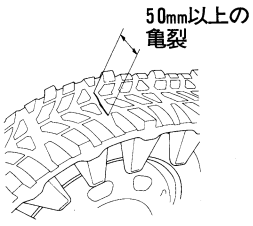
注意

●タイヤの使用限界をこえて使用すると、思わぬ事故の原因となります。ウェアインジケーターやサイドウォールのゴムが表われたらホンダ販売店で交換を受けてください。

クローラの亀裂、損傷

クローラの接地面や内側に著しい亀裂や損傷がないかを目視により点検します。



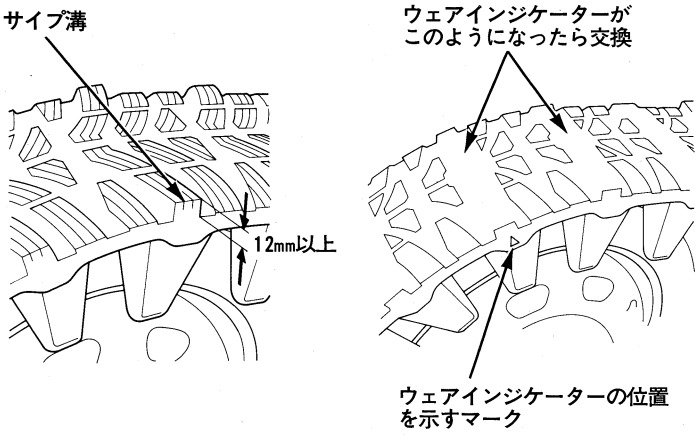


注意

●クローラの亀裂が50mm以上のときや、芯線（スチールコード）や芯金が露出している場合は思わぬ事故の原因となる恐れがありますのでホンダ販売店でクローラの交換を受けてください。

クローラの溝の深さ、摩耗

クローラのウェアインジケーター（摩耗限度表示）により接地面や内側に極端にすり減った所がないかを点検します。



注意

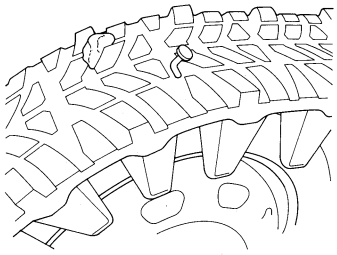
●クローラの使用限界をこえて使用すると思わぬ事故の原因となり危険です。ウェアインジケーターが表われたらただちにホンダ販売店でクローラの交換を受けてください。

アドバイス

●クローラの残溝の深さが12mm以下（サイプ溝がなくなる）になると積雪路、凍結路、高速での走行性能が低下しますのでできるだけさけてください。

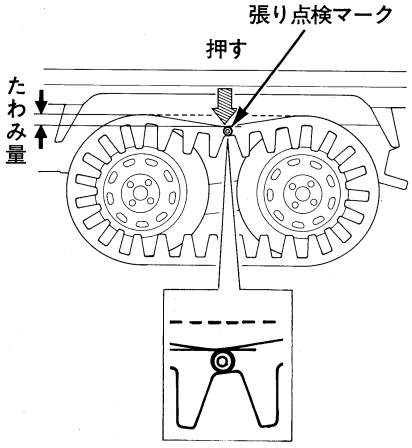
クローラの異物

クローラに釘や石などがささったり、かみ込んでいないかを目視や手でさわって点検します。



クローラの張り

クローラに表示してある張り点検マーク部をミッドタイヤとリヤタイヤの中間に合わせ手で強く押して（10kgの荷重）たわみ量を点検します。



適正たわみ量 ……5.0～7.0mm

注意

●たわみ量が5～7mmの範囲から外れている場合はホンダ販売店で調整を受けてください。

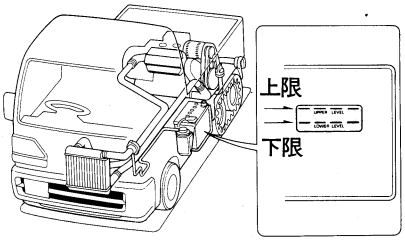
アドバイス

●クローラの表面が変色することがありますが異常ではありません。

各部にわたって念入りチェック。

バッテリーの液量

バッテリーの液面が各槽とも上限と下限の間にあるかを目視により点検します。



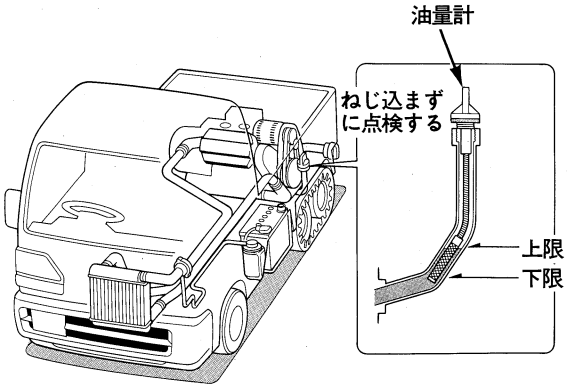
●バッテリーを取り扱うときはショートによる火花や火気に注意してください。バッテリーからは可燃性のガスが発生しているので引火すると爆発の危険があります。

●バッテリー液は希硫酸です。目や皮ふにつくとその部分が侵されますので十分注意してください。
万一、付着したときは、すぐ多量の水ですくなくとも5分間以上洗浄し、専門医の診断を受けてください。

エンジンオイルの汚れ、量

エンジンを停止させ、油量計(オイルレベルゲージ)により、油量が目盛りの上限と下限の間にあるかを目視により点検します。また、油量計に付着したオイルを手でさわるか、または布などに付着させ、オイルの汚れ具合も点検します。

エンジンオイルの補給 ↓16ページ

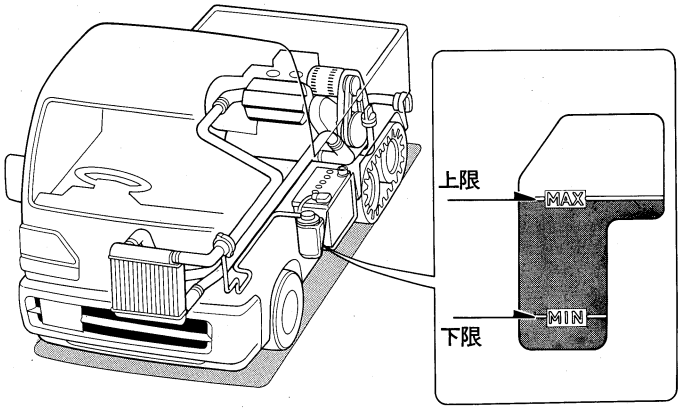


●点検は平らな場所でエンジンを始動する前か、またはエンジンを止めてから少なくとも3分以上たってから点検してください。

冷却水の量

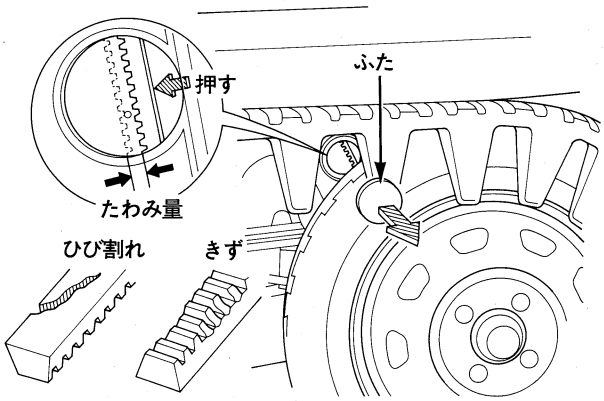
ラジエーターリザーバータンク内の冷却水量が上限(MAX)と下限(MIN)の間にあるかを目視により点検します。

冷却水の補給 ↓17ページ



発電機ベルトのゆるみ、損傷

点検窓のふたを外し、発電機ベルトの中央部を強く押して（10kgの荷重）、ベルトのたわみ量を点検します。
このときベルトに傷やひび割れがないかも調べます。
適正たわみ量…9.0～10.5㎜

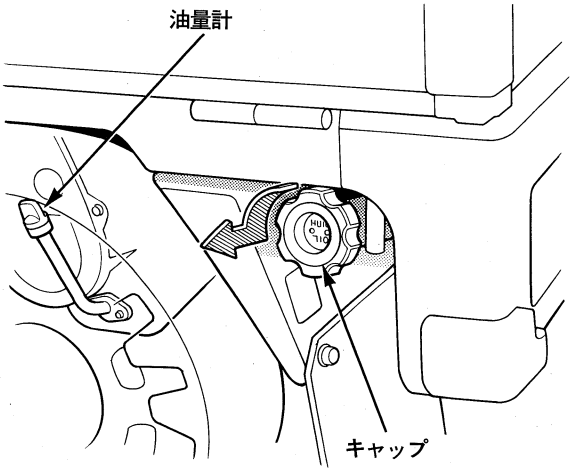


簡単な整備

整備の際には次のことに注意してください。

- 安全な場所を選んで行ってください。
- 適切な工具を使ってください。
- 安全のためエンジンは停止状態で行ってください。
- 駐車ブレーキレバーを十分に引き、輪止めをするなどして、車を動かないようにして行ってください。
- 自動車をリフトアップするときには、適切なジャッキを使ってください（車に備え付けのジャッキは、前輪の交換時のみ使うものです）。

エンジンオイルの補給



キャップを回して取り外し、油量計で確かめながら上限まで補給します。
補給後、キャップは確実に締め付けます。
補給がすんだらエンジンをかけ、1分間アイドリングした後、エンジンを停止し、3分以上たってから再度、油量計で確かめます。

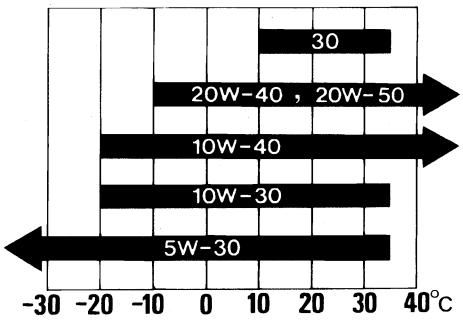
適正品を適量補給。

推奨オイル…
ホンダ純正オイル（4サイクル四輪車用）

ウルトラMILD
（API SG級 SAE 10W-30）
ウルトラLTD
（API SG級 SAE 10W-30）
ウルトラGOLD SPECIAL
（API SG級 SAE 10W-30）
ウルトラGOLD
（API SG級 SAE 5W-30）
またはAPI SG級以上か、オイル缶にILSAC CERTIFICATION（イルサック サーティフィケーション）マークの入ったエンジンオイルをお使いください。

ILSAC CERTIFICATIONマーク

エンジンオイルは、外気温に応じた粘度のものを左表にもとづきお使いください。

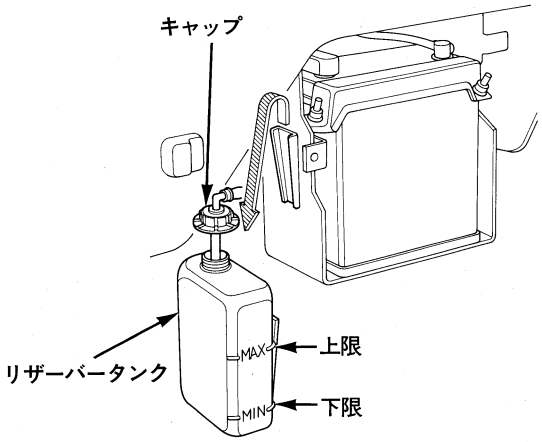


アドバイス

- 作業は平坦な場所で行ってください。
- 補給するときは、キャップ部からゴミなどが入らないようにしてください。
- オイルの量は上限を超えないようにしてください。
- オイルをこぼしたときは、完全にふき取ってください。
- 銘柄やグレードの違うオイルを混用したり、低品質オイルを使わないでください。

冷却水の補給

カバーを外し、リザーバータンクを上へずらして取り外します。リザーバータンクのキャップを外し、タンクの上限（MAX）まで補給します。



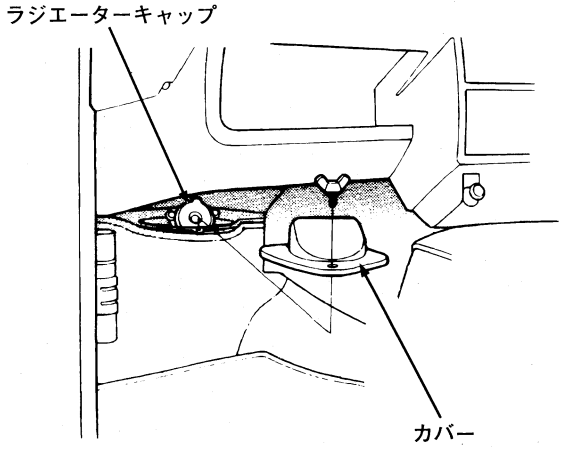
指定液の濃度を50%にしてお使いください。

指定液：ホンダ純正ウルトララジエーター液

液面は暖機時に上がり、冷機時に下がりますがエンジン温度に関係なく上限（MAX）まで補給します。

リザーバータンクに冷却水がないときは助手席足元のラジエーターにも補給します。

カバーを外しラジエーターキャップを回して外し、ラジエーターの口元まで冷却水を補給します。



- **上限（MAX）を越えて補給しないでください。**
- **ラジエーター原液を規定濃度に薄めるときは上水道（軟水）を使ってください。**
- **指定以外のラジエーター液や不適当な水を使うと、錆などの原因となります。**

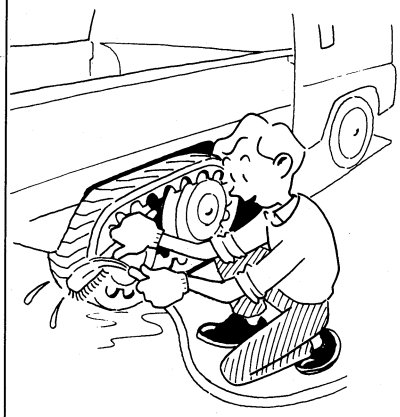
- **冷却水の減り具合が著しいときは、水漏れが考えられます。必ずホンダ販売店で点検を受けてください。**

- **水温が高いときラジエーターキャップを外すと、冷却水には圧力がかかっていますので蒸気や熱湯がふき出し、やけどなど思わぬけがをすることがあります。水温が下がってから、布切れなどでキャップを包み、静かに開けてください。**

走行後の手入れ

付着した泥、雪などの除去

運転後、付着した異物は固着や凍結を防止するため、よく取り除いてください。特にクローラなどの足廻りやラジエーターなどはよく汚れを落としてください。作業の際は、鋭利な物でたたいたりしないでください。



アドバイス

●不整地走行又は農薬、肥料などを使った作業の後は、よく車体を洗浄してください。

●洗浄後、各部の変形や損傷などが無いか点検してください。

万一、異常があればホンダ販売店で点検、整備を受けてください。

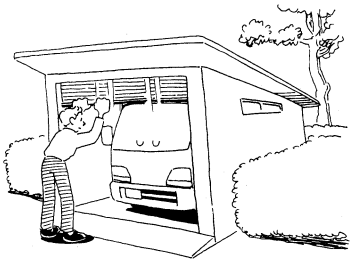
格納について

保管や格納する場合には、次の事を守ってください。

1. 車両、特にクローラやタイヤなどの足廻りについた汚れはきれいに洗い流してください。
2. 長期間使用しない場合は直射日光や雨水をさけて保管してください。屋外で保管する場合は、シートカバーなどを使って車体を完全にカバーするようにしてください。

注意

●クローラおよびタイヤへの有機性塗料や錆止め剤、油などの使用はさけてください。ゴムが侵され芯線や芯金の腐食や損傷につながります。



サービスデータ

タイヤサイズ			145R12-6PR LT※1	90/105D13-8PR LT※1
タイヤ空気圧 (kg/cm²) 一般・高速走行時共	2名＋100kg以下	前輪	1.8	———
		後輪※2	———	3.0
	定積載	前輪	2.0	———
		後輪※2	———	3.0
リムサイズ			12×3.50B	13×3.00B※3
タイヤの残溝の深さ(mm)			1.6(高速走行時：2.4)以上	1.6以上
タイヤローテーション			———	ミッド、リアタイヤ交換5000kmごと※4

※1．指定タイヤをお使いください。(指定タイヤ　オーツHS302またはダンロップTG4)
※2．ミッドタイヤとリアタイヤ
※3．指定以外のホイールやリアタイヤを使用すると車両、走行性能に悪影響をおよぼす危険があります。交換の際は必ずホンダ販売店にご相談ください。
※4．ローテーションはホンダ販売店でお受けください。

クローラサイズ	15.5—290BN
クローラの残溝の深さ(mm)	7.5以上（積雪路、凍結路、高速走行時は12以上）
※5クローラの張り	10kgfで押して5～7mm

※5．クローラの張り調整は販売店でお受けください。(初期調整：1000km走行時)

乗車定員(名)	2
最大積載量(kg)	350

名　称	アクティ　クローラ
型　式	V-HA4改
エンジン型式	E07A
排気量(cm³)	656
タンク容量	30ℓ

点検整備方式

・この点検整備時期は6か月で5,000キロ程度走る車で、とくに悪路等過酷な走行をしない自家用車を対象に定めてあります。したがって著しく走行条件の異なるものは、この時期より早めに点検整備することが必要です。
・この表はアクティ クローラ特有の項目をあげてあります。この項目以外は整備手帳をごらんください。

点検整備項目			点検整備時期				区分
			運行前	自家用			
				6ヶ月毎	12ヶ月毎	24ヶ月毎	
走行装置	タイヤ	空気圧	○	○	○	○	Ⓐ
		サイドウォール摩耗	○	○	○	○	Ⓐ
	ホイール	ホイールBRGのガタ				○	Ⓑ
	クローラ	亀裂、損傷	○	○	○	○	Ⓐ
		溝深さ、摩耗	○	○	○	○	Ⓐ
		異物かみこみ	○	○	○	○	Ⓐ
		張り	○	○	○	○	Ⓐ
	アクスルビーム	損傷、変形				○	Ⓑ
		ピボットBRGのガタ				○	Ⓑ
		テンション機構のしぶり		○	○	○	Ⓑ

区分：Ⓐ点検を行うに当って、自動車の構造装置に関する基礎的な技術知識を有する人であれば自らでも実施可能なもの。
Ⓑ点検を行うに当って、専門的な技術知識を必要とするもの、専門的な機械、工具測定器具を必要とするもの、装置または部品の分解、取外しを伴なうもの。

HONDA
本田技研工業株式会社
東京都港区南青山2－1－1

30SJ6802
00X30-SJ6-8020

Ⓝ20009411S